

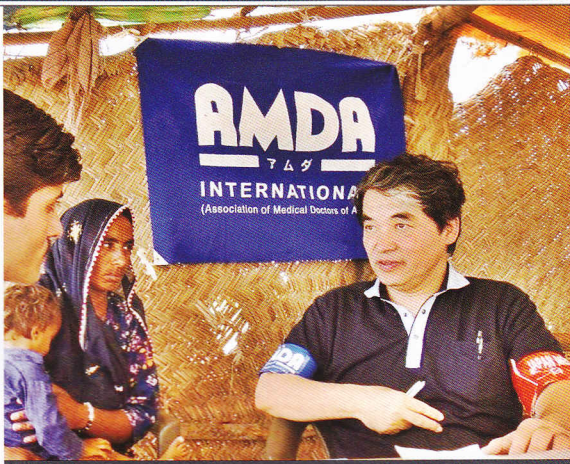


大槌高校内診療所で診察に当たる医師  
南三陸町の避難所で診療を行う  
AMDA医師



た後は、まさに放浪そのものでした。八カ月から帰国した時、下駄ばきでバキスタン軍から払い下げられたカバンを肩からぶらさげているという一人前の和製ヒッピーになっていました。

プロフィール  
AMDA (The Association of Medical Doctors of Asia) 発展途上国への緊急支援ボランティア団体。国連経済社会理事会(UNECOSOC)より特殊協議資格取得、国際医療情報センター、国際福祉事業団、岡山市を本拠とし世界三十カ国に支部を持つ。  
私の原体験 著書『遥なる夢―国際医療貢献と地域おこし―』より  
高校二年の時に出会った一枚の写真。当時の私とちょうど同い年くらいの一人の日本人兵士が、海岸の浅瀬に顔を半分突っ込んで死んでいる写真でした。夏の真昼でセミがうるさいくらいに鳴いていたのをよく覚えています。初めて目にした時は、金縛りにあったようにしばらく目を離すことができませんでした。兵士の死に顔はそんな死に方にもかかわらず非常に安らかでしたが、自分とそう年の変わらない彼がなぜこのような死を迎えたのか疑問でした。太平洋戦争中の数限りない死の一つにすぎなかったのかもしれませんが、この写真は多感な青春時代にあった私にアジアへのこだわりを抱かせることになりました。岡山大学医学部四年生になった私は当時の日本の若者のバイブル『なんでも見てやろ』(小田実著)という本をリュックサックに入れてアジアへの人旅へ出発しました。私が最初に訪れたアジア救済協会インドセンターは日本の民間で設立されたハンセン病専門でした。医学生だった私は、ここで初めて国際医療協力の現場を体験しました。センターでの研修を辞した後は、まさに放浪そのものでした。八カ月から帰国した時、下駄ばきでバキスタン軍から払い下げられたカバンを肩からぶらさげているという一人前の和製ヒッピーになっていました。



## 古川 修のインタビュー



### 菅波 茂さん

特定非営利法人  
AMDA理事長・医師

### 人道援助の三原則を堅持して

古川 いろいろな国際人道支援団体があるなかで、日本でこんなに幅広く活動している団体があるなんて、恥ずかしながら知りませんでした。組織の概要を教えてください。

菅波 災害や紛争発生時、医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開し、多国籍医師団を結成しています。設立は一九八四年。支援活動は相互扶助の精神「困ったときはお互いさま」の心に基づき、「人道援助の三原則」を活動成功の鍵としています(一)誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある、(二)この気持ちの持ちが、国境・民族・宗教・文化等の壁はない、(三)援助を受ける側にもプライドがある(四)。

古川 この三原則というのは、欧米系の援助団体とは少し異なるポリシーですね？

菅波 欧米の団体はやはりキリスト教精神がベースでしょう。われわれの「国境・民族・宗教・文化等の壁はない」という立場は、仏教、神道的ですから、対立する紛争地域の一方だけを善と決めつけて援助するという立場はとれません。多様な価値観の共存を認めます。紛争や災害で被害を受けるのは常に弱者です。私たちはコンソポ紛争を始め、インドネシアのアチェスリランカ、アフガニスタンなど、どこでも紛争の両者の地域に入りました。

古川 なるほど、「教化・上から目線」で援助してやる、というのは一種の大東亜共栄圏、「援助を受ける側のプライド」を傷つけますね。

### 「HowよりもWhy」

菅波 「どのように援助をするか」よりも、「なぜ援助をするのか」が大切です。インドネシアのアチェでは「私たちが援助するのは、日本が被害を受けたら、こんどは助けて欲しいからです」と話したら、県知事が「そんなことを言った援助団体はあなた様が初めて」と述べて喜んでくれました。「水の災害」という意味ではインドネシアは大津波と戦った経験をもつ先輩ですから、今度は日本もインドネシアから学ぶことがたくさんあるはずで、「相互援助」という立場です。世界にある三十の支部とはすべて対等な関係で、現地の人たちが「インシアチブ」とすることを徹底しています。

古川 ちょっと言いにくいのですが、こんどの東日本大震災では少々「被災ナショナリズム」とも言うような「日本はすごい」「日本ガンバレ」が氾濫しすぎているように思えます。紛争・災害に苦しむ発展途上の弱者を忘れそうです。宮澤賢治は「世界全体が幸福にならないかぎり、個人の幸福はない」と言っていますよね。もちろん被災当事者からは「われわれの苦痛を理解して」と非難されそうです。

### 「ほんとうの弱者は自殺さえできぬ」

菅波 いや、本当の弱者は茫然自失。自殺さえできない。もうどうすることもできない人です。「弱者の恫喝」をするのは本人ではなく周囲です。「被災インテリナショナリズム」へ昇華するといいますが、古川 「人災」と「天災」の区別がいまいちになって、責任の所在がわ

からなくなるようですが？

菅波 それは簡単です。欲が絡んだのが「人災」です。「想定外」という言い方で、防ぐことができた災害も「天災」に帰してしまおう傾向がありますね。

古川 それでは、援助する立場から世界を見るとどうでしょうか？

菅波 英国のBBCの調査によれば「世界で一番嫌われない国は日本」なんです。過去、一二十五兆円にもおよぶ日本のODAは、「ばらまき」と批判されたこともありましたが、意外と等距離外交で効果をあげている面もあります。北欧三国が人道援助で「インシアチブ」を握るのは「政治的に中立、他国を侵略していない、人権という「コンセプト」がはっきりしている」ということに原因があると思います。日本もここから学ぶべきです。

### 「同情から尊敬へ」

古川 あれだけの震災でなぜ「略奪」が発生しなかったのか、世界が不思議がっています。

菅波 日本の「町内会」システムが機能を発揮したんです。町内会は行政とコミュニティーの仲介役として動き、被災地で自律的な動きの原動力になっています。それと私は「被災者をボランティアにするな。雇用をせよ」と訴えています。被災者に同情するだけではなく、復興の仕事のために被災者を雇用することで「すべての人が必要とされている」ことを自覚してもらい「人間の尊厳をまもる」。これが援助の第一原則です。

古川 深く納得する点が多々ありました。貴会の一層の発展を祈念しております。